



第3回かながわ感動介護大賞

～ありがとうを届けたい～

受賞作品

平成26年11月11日

かながわ感動介護大賞実行委員会



目次

○第3回かながわ感動介護大賞 応募作品の総評	……	1
○受賞作品		
最優秀賞	自分の足で3階まで歩けた	……2
優秀賞	ニーハオ	……4
	いってらっしゃい	……6
	先生と呼ばれているの	……8
	困難を乗り越えて	……10
	今年の干支は？「うま」	……12
特別賞	優しさに触れて	……14
	ヘルパーさんが起こした奇跡	……15

▽第3回かながわ感動介護大賞 応募作品の総評△

本年度から、かながわ感動介護大賞の応募資格に「介護サービスを行っている職員」を加えさせていただきました。今回の応募総数は55件。ご本人から30件、ご家族から17件、そして、介護職員の方からの応募は8件でした。さらに、最優秀賞と優秀賞の対象とはなりません。応募資格以外の方の応募も受け付けています。感動介護大賞の趣旨をご理解いただき、様々な立場の方に応募していただければ幸いです。(詳しくは、神奈川県ホームページをご覧ください)

感動介護大賞も今年で3年目となりましたが、初めて小学生のお孫さんからの応募がありました。また、100歳に近い高齢の方からの応募もありました。エピソードの内容だけでなく、応募者の幅広い年齢からも少しずつ感動の輪が広がっていることが感じられました。そして、今回の応募作品を読ませていただき、何気ない日々の積み重ねの中にこそ、大切なものが眠っているのかもしれないと感じさせられました。

かながわ感動介護大賞表彰選考会座長 峯尾 武巳

児玉 郁子 様

感動介護を行った事業所

社会福祉法人大和清風会
居宅介護支援センターサンホーム鶴間

2011年12月、夫と伊豆高原旅行中にホテルで転倒。右手首・右足太たい骨を骨折・頭を強打してしまいました。右も左も分らないところでの事で夫はパニックになり、東京代官山に住んでいる息子を急ぎよ呼び、介護タクシーを利用して居住している大和市に戻り大和市立病院に入院、手術をしました。

手術は上手くいき、担当医師に「貴女は腰がともしっかりしているのでこれからも大丈夫でしょう。手首は自然に治るのを待ちましょう。」と云われ、すぐにリハビリに入りました。しかし強打した頭が中々シャッキリしなかつた為、スタッフとしよう突したりして3カ月ギリギリ入院しデイサービスを利用する為施設に入りました。施設は自宅の近くにすぐみつきり週二回、訪問介護を一回の生活が始まりました。（介護4の認定でした）

しかし大きな困った事がありました。傷は良くなっているのに頭の方がすつきりせず車椅子全面使用の状態でした。加えて住居がエレベーターの無い三階建の三階で車椅子を使用できず、デイサービスのスタッフがマンションの階段を私をおぶって行き往したのです。又狭いマンションなので家の中で車椅子を使えず家にいる時は、すわりっ切りか寝ている丈の状態になってしまいました。必然的に

うつ状態になってしまいました。

そんな生活を一カ月位続けたでしょうか：ある日デイサービスのスタッフが「児玉さん！マンションの階段を歩いてみませんか。僕が後にぴったりついていきますから心配しないで：ダメだったらやめましょう：」と云ったのです。おそるおそる歩き出しました：そうしたら歩けたんです！！三階迄自分の足で歩けたんです！！我が家にたどり着けたんです！！

ドアの前に夫が待っていました。信じられないと云う顔で私をみました 「ヤッター！児玉さん！！歩けましたね バンザイ！！！！」

次のデイサービスに行ったら私が歩けた事がスタッフに知れていて、拍手で迎えてくれました。有り難うスタッフの皆さん！！それからの快復は私はもとより家族も施設のスタッフもびっくりびつくりでした。頭の方も徐々にスッキリ！健常者に近くなってきました。

▽講評△

『自分の足で三階まで歩けた』の表題のとおり、この作品は、歩けるに至った喜びがいっぱい詰まっています、まるでドラマを見ているようです。旅先の転倒事故から入院手術・リハビリへ。退院後のデイサービスもマンションの階段を背負ってもらったの上り下りが続き、家の中では寝たきり状態同様の苦悩と不安の日々……。しかしスタッフの頃合いを見計らった提案で無事階段登頂に成功します。この歩行成功体験、続く体験の共有・受容が快復力を高めていく過程は、“ご本人の力を引き出す” 典型的実践のひとつといえましょう。

倉本 美子 様

感動介護を行った職員

SZD商事株式会社 ホームヘルパーステーション寿

郭^{かく}桂霞^{けいか}さん

「二一ハオ」と、郭さんは週1回1時間、お風呂を入れに来てくれます。父、95歳は、にっこりし、楽しみにしていた中国語の会話が始まります。郭さんは、帰国子女の夫と、日本で暮らし、中国には90代のお父さんがいらつしやるそうで、父のことを、まるで自分の父のように手をやさしくにぎってくれます。家族が介護の愚痴を言うのと、「大丈夫、大丈夫。」と言ってくれます。その日本人とちよつと違うイントネーションの言い方に癒されるのです。

父は戦争中、中国に行っており、中国語がしゃべれるのです。もう少し若い頃は、中国人がいる店があると聞けば、行ったりしたものでした。機嫌のいい時は中国語がでるのですが、誰も相手ができませんでした。

郭さんが来るようになって1年以上になりますが、中国語が、じょうずになったと、父もほめられるようになりました。家族には、今2人で何を話していたか郭さんは通訳してくれます。郭さんは、仕事のない時は日本語を、勉強しているそうで、家族との会話や、毎回の報告書も日本語で書いてくれていますので何も問題ないのです。

父の頭の中は戦後すぐのようです。郭さんのおかげで、父も家族も癒されています。

93才の母もいますし、デイサービス、ヘルパー、訪看など多勢の方に助けられ2人を介護しています。

父母は、義理の両親です。

▽講評△

本県は全国的にも在住外国人の多い県ですが、こうした外国人の方が介護従事者として働く姿を目にすることも、最近では珍しいものではなくなってきました。言葉や文化の違いにより、実践において様々な困難も想定されますが、外国人としての特性を活かした介護実践ができていると評価したのが本事例でした。特に、明るく元氣な対応を心掛け、外国語でのコミュニケーションを通じて、利用者本人の生活にも良い影響を与えていることがわかる事例だと感じました。

感動介護を行った事業所 株式会社鴨清 フォレストケアサービス

「門田さん。おはようございます。」「はいはいはい。・・・行ってきま〜す。」
毎朝、玄関から聞こえる会話。数カ月前までは当たり前のことではありませんでした。

義父が認知症と診断され、デイサービスを利用するのはフォレストさんで3件目です。
これまでは途中で帰って来てしまったり、「行きたくない。」と拒んだり。
今回こそと、飛び込んだ体験日、義父は途中帰宅もせず、お風呂も済ませて帰ってきたのです。
今回は何か違うみたい。よし、フォレストさんをお願いしよう。
と、決心して1か月目―気付くと庭の水撒きをしていたり・・・。「ズズズズ」と、すり足のようだった足音は力強くなり・・・。何度も目を覚ましていた浅い睡眠も解消され、朝までぐっすり・・・。
これまで一度も無かった嬉しい変化に私たち家族は驚きました。

変化の秘密は「散歩」です。フォレストさんでは毎日散歩に出かけ、時には近所へ買い物にも連れて行って下さいます。外出の方が室内の活動よりスタッフさんは大変なはず。それでも毎日義父に新しい刺激を下さるのです。

日々の散歩により足元も「心」も安定している義父を見ると、安心して送り出せる喜びを実感します。
頼もしい所長さんと、信頼できるスタッフさん達に、本当に感謝しています。
これからも義父の大切な時間をお任せしたいと思います。

―今日も義父は玄関でフォレストさんのお迎えを待っています。

▽講評△

認知症の人の介護は、身体的な疲労だけでなく精神的な負担も多いと思います。本作品の中からも、ご家族の苦労が読み取れました。しかし、苦労だけでなく、介護を通して感じとったご家族の喜びと感動も読み取ることが出来ました。

介護は人がひとに対しておこなうことです。介護の質は職員の質そのものといわれています。「これまで一度もなかった嬉しい変化に私たち家族は驚きました」という言葉から、介護の質についても改めて考えさせられた作品でした。

感動介護を行った事業所

株式会社KEEP UP
リハビリデイサービス ポーラスター鵜沼

生後間もなく実母を亡くし、祖母に育てられた母は頼る実家もなく、夫の単身赴任も重なり肩肘張って私達兄弟三人を育てた為か、人様のお世話になるのが苦手です。

幾つかの事業所様を見学させて頂きましたが、何でもして下さろうとする折角の職員の方の働き掛けに母は返って戸惑っているようでした。肩を骨折しても私達からカーディガンを着せてもらうのを拒み、自分から「袖を通して。」と言って始めて手伝うのを受け入れるような母です。姉とも相談し「何かして頂くだけでなく、自分が役に立っている。と母が実感できる何かを見つけ出そう。」と思いきりました。

そんな折「ポラーラスター」の佐々木様よりお電話を頂いたのです。今までの経緯をお伝えすると「私達は御自身でできる事に一切手出しはしません。漢字のクロスワードパズルも個別のスピードで対応させて頂いています。娘さんが付き添うと御家族の心配が御本人の甘えにつながります。車の送迎時からお任せ頂けませんか。」と爽やかで力強いお言葉を下さいました。

あれから三カ月。母はパズルを通して職員様に漢字を教えて差し上げながら、自分が役に立っているかと実感し、時には「先生と呼ばれているの。」と嬉しそうです。車の窓から満面の笑みで手を振る母に「行ってらっしゃい。」と安心して手を振り返せる今、職員の皆様への感謝が、胸一杯に広がっていきます。



▽講評△

「・・・お任せいただけませんか。」、「ご家族はこの言葉にさぞかし心強く感じたことでしょう。また、事業所の皆さんの知識と技術、経験に裏打されたサービスに自信があるからこそその言葉と対応が、ご家族の信頼につながったことと思います。

社会で生活する中で役割を持つことは、生活に生きがいや張り合い、その人らしさを表現できる大事な要素です。ご家族は役割を持ったご本人の表情や言動がより良く変わっていく姿に感動されたことでしょう。

小林 幸子 様

感動介護を行った事業所 社会福祉法人清流会 玉川グリーンホーム

寄り添い、共に生きて50年に。主人が平成23年にアルツハイマー認知症と診断されて、平成25年3月介護申請で介護度3と認定される。5月から介護サービス利用し施設に行くことに「なぜ行かないとまらないのか」と言って拒み、徐々に風呂と夜間のトイレ介助が大変になる。

心配しても仕方がない、事が起きた時に対策を考えようと決めて日々を過す。

全介助が必要となり「私も身体疾患があり」体調を崩しショートサービスを利用するがダメージを受けて帰宅する。徘徊と頻尿のため放尿し介助で寝る事が出来ない状況となり、2月病院の受診、介護度見直しで介護度4と認定される。

認知症型グループホームに3月入所するが徘徊と頻尿のため放尿で薬の調整目的で4月入院、5月施設の入所が決まり、病院を退院し施設へ入所暖かく迎えて下さいました。「病院を一刻も早く退院されて、此方でお預かりします。」の言葉に感動し励まされての入所でした。

そして、皆さんの暖かな介護に有難く、手厚い介護が伝わり「春雄さんの居場所」は此しかない心安堵したことを忘れる事が出来ません。本当に有難く“感謝”の一言です。

困難を乗り越え、施設との出合があつて私も春雄さんに優しく出来る喜びを実感しています。



▽講評△

家庭とは家族が生活する場・・と言われますが、長年連れ添った夫、妻が認知症になり介護が必要となったら。お互いを思いやる気持ちが大切とわかっていても日々積み重なる「介護」には押しつぶされそうになると思います。そんな時に「春雄さんの居場所」を得られた事はご本人はじめ介護を担う家族にとって、どんなにか心強かったか、ご主人の進行して行く状況とともに心安らぐ「居場所」がご本人のみならず介護するものにとっても大切であることを改めて感じさせてくれる文章でした。

株式会社若武者ケア 港南事業所 齋門 幸恵 様

〇〇さんを訪問してそろそろ二年、脳梗塞の後遺症で言葉が出ない〇〇さん。「〇〇さん、おはようございます。今日も良い天気ですね。出かける用意をしましょうね」と声をかけて更衣介助をするも返答はしてもらえませんでした。別の日に入るヘルパーさんの記録をみると「おはよう」や「うなずきがある」と書かれていました。

私の事はきらい？介助のやり方が悪い？次はどう声掛けをしよう、どんな話題だったらいいだろう？と考えながら訪問を続けるも私に対しての返答はありませんでした。

あるお正月明けの訪問の時でした「〇〇さん明けましておめでとございます。今年もよろしくお願います」と、挨拶。いつものように介助をしながら「今年の干支はなんでしたかね？」と話しかけた時でした。〇〇さんが「うま」と応えてくれたのです。私はびっくりしたのと同時に「今何て？」とも思いう一度聞きなおしましたが応えてはくれませんでした。

でも私にははつきりと「うま」と聞こえました。私にたいして初めての返答でした。この時のうれしさは今でも忘れられません。

あれから半年が過ぎました。問いかけに対してあの時の様にはつきりとした応えはありませんが、時折問いかけにうなずいて下さるようになりました。

次は言葉で応えてくれる日を楽しみにこれからも訪問します。

▽講評△

いちばん難しい介護のひとつは、反応のない方へのものかもしれません。

このような場合、本当は良くないと分かっているけど、意志疎通をあきらめてしまったり、マイペースで仕事を片付けてしまったりという経験をしている介護者は案外多いと思います。

しかし齋門さんは2年近くもあきらめず努力を続けられました。「うま」とのお返事は、齋門さんにとってこのご家庭でのお仕事への答えであり今後の活力ともなるくらい大切なものだったのではないのでしょうか。

発語の数は減っていても「うま」の2文字の裏には、表現できないたくさんさんの思いが詰まっているかもしれません。齋門さんの問いかけでいろんな記憶がよみがえるならば、介護サービスの時間は利用する側にとって、きっと楽しいひとときになっていると思います。

特別賞

「優しさに触れて」

高橋 洋平 様

感動介護を行った事業所 社会福祉法人八寿会 特別養護老人ホームみどりの園

朝8時過ぎになると、電話のベルを待ち心になる。「おはようございます！みどりの園の〇〇です。9時にお迎えに参ります。」という明るい声で始まる朝の知らせは私の1日のスタートだ。

ホームに着くとテーブルまで、手を取って誘ってくれるスタッフの温もりには、嬉しく、ほっとする。

介護される立場にいと、スタッフの心遣いに心からの感謝を「ありがとう」の言葉だけで私の気持ち伝わっているだろうか。

お、も、て、な、し、おもてなし、、、とスピーチで滝川クリステルが話し、日本人の国民性に気付かされた。その言葉通りの深い優しさを、スタッフの皆様から頂く。それはサービスというのとは全く違う種類の温かい心を相手に捧げる日本人の素敵な行為だ。

ありがとう、ありがとう、、、又よろしくね。

特別賞

「ヘルパーさんが起こした奇跡」

棚井 聖麗 様

感動介護を行った職員 有限会社ダーム ダームメディカルケアサービスつきみ野

伊藤 勇樹さん、後藤 和彦さん

私は、生まれた頃から、体の不自由な祖父と暮らしている。祖父は、車いすで、ヘルパーさんがいなければ、色々な場所に出かけることはできなかつたはずだけど、ヘルパーの伊藤さん、後藤さん、その他のヘルパーさんのおかげで祖父の出身の山梨に行くことができている。そんな祖父に、今年更なる苦しみがおそってきた。それは右足の状態が悪化して、毎日見ていくうちに右足切断というところまで追いこまれていた。母やヘルパーさん達が必死に介護をしていたが、その苦勞は報われなかつた。

1月の手術当日、私は立ち会いたかつたが、学校があつたので、立ち会えなかつた。学校にいる間ずっと気になって仕方がなかつた。なぜなら、祖父は色々な病気のトラブルがあり、手術中に死んでしまふかもしれないと母に言われていたからだ。結果は、手術は成功した。3月に無事退院し、祖父の実家のある山梨に、ヘルパーさん達の力をかりて、ゆくことができた。

祖父の大好きな富士山を見ながらとなりで母が泣いていた。祖父も、嬉しそうな表情をしているとは思つた。この日、母とヘルパーさんたちの介護の努力がやっと、報われたと思つた。

私や母、家族だけではなく、たくさんのヘルパーさんたちがみんな、祖父を思つて祈つてくれたから、神様が、祖父を助けてくれたと思つた。私は、将来ヘルパーさん達のような、人を助けられるような人になりたい。